

感動したことがある。中国人社会を熟知している著者だからこそできたことだと思う。著者は常に謙虚に研究対象に向き合い、丁寧に話を聞き、また納得しないことについては何度も聞き方を変えながら聞き直す。こうした著者の妥協しない研究姿勢も評者にとってたいへん印象深かった。

本書の最後で、著者は南米のウルグアイの元大統領、ホセ・ムヒカ氏が来日した時の言葉を紹介している。「楽しんで仕事をしている人は幸せだ!」。著者にぴったりの言葉である。

(張 貴民)

久木元美琴：『保育・子育て支援の地理学 ー福祉サービス需給の「地域差」に着目して』明石書店、2016年10月刊、224p., 2,800円(税別)

「保育園落ちた日本死ね!」

2016年2月、ある母親のつぶやきが日本中を駆け巡った。ネット世界で瞬く間に拡散されたかと思うと、数日のうちには新聞各紙が取り上げた。

この短いメッセージへの反響がこれほど大きかったのは、インパクトの強い言質もさることながら、その背景にある、なかなか前進しない待機児童の問題の深刻さや、それに直面する母親たちの苦悩と絶望、またそうした状況に目を背けたまま既存の社会の中で「女性の活躍」を求められることに対する違和感に対し、共鳴する人が多かったからではないだろうか。そうした人々の思いが大きくなるとなったのだろう。この発言は、1か月も経たないうちに国会にまでも届いた。さらに2016年の新語・流行語大賞のトップテンにも選ばれたそうである。

常態化する保育園に入れない「待機児童」や子どもを保育園に入れるための「保活(ほかつ)」は、このところ、メディアでもしばしば取り上げ

られる。「どうにかしなくては」という主に母親たちの焦りが、彼女らを熾烈な「保活」に駆り立てており、それが注目を集めるのであろう。しかしその取り上げ方はあくまで個別的であり、話題性を狙った打ち上げ花火のようにも見える。評者は二児をもつ一人の母親として、本当に「待機児童」や「保活」の問題が社会で共有されているのだろうか、逆に母親の不安を煽り、事態をさらに深刻にしてしまっているのではないかと違和感を覚えることがある。母親たちの不安が空回りし増長されることなく、子どもにとっても保育者にとってもよい環境の保育が実現するためには、個々の問題を全体の問題として共有化し、そのうえで冷静に着実な対策を練っていくことが求められよう。

より抜本的な対策が必要なのは言うまでもない。ただしこれには中長期的な視野が必要で、当然時間もかかる。しかし一方では、今「待機」を余儀なくされている人にとって、10年後の解決では意味がなく、簡易でも即効性のある対応が求められている。この両方の間でいかに折り合いをつけながら対策が進められるべきなのか、行政、施設、保護者、保育者がそれぞれどのように関わるべきなのか。なかなか正解が見えにくいなか、保育をめぐる地域固有の問題とローカルな対応の在り方をまとめた本書は答えの一つを示しているようである。

本書は、保育をめぐる「多様化」と「地域」を軸に構成されている。保育の需要は世帯構成、女性就労の状況、子育て世帯の生活・就業のパターンによって左右されるが、これらは地域差が大きい。少子化や働き方の多様化、子育てに関する価値観の変化を背景に、保育のニーズは多様化しており、それを担う有力な存在として期待されるのが「地域」でもある。本書では、保育ニーズの多様化に対する地域的対応とその背後にある社会・

経済的な文脈が、①経済・産業的な要素、②社会・文化的な要素、③政治的な要素から総合的に論じられており、保育サービス供給と需要の地域的背景について理解しやすい。また、大都市・地方それぞれの地域のニーズに対応した解決のあり方を検討するための視点も示されており、学術書としてだけでなく、実務的にも価値があるだろう。

本書にもう少し入り込んでみよう。本書は、9章から成っており、1章と2章で全体を俯瞰した後、3章以降では、「多様」な子育ての現状が、精緻なアンケート調査や聞き取り調査の結果をもとに具体的に示されている。1章は、子育て支援と地域について、福祉を扱った地理学分野における既存研究の成果を踏まえながら本書の視点を示すとともに、日本における保育供給の展開についてまとめられており、2章は、日本における保育所を中心とした子育て支援の変遷と現状、および子育て支援に対するローカルなニーズを生み出す世帯構成や女性の働き方の地域的傾向について、「ローカルな保育ニーズ——家族と働き方の地域差に注目して」「都市問題としての「保育所待機児童」」「大都市圏内部の待機児童と保育サービス供給の地域差」という点から述べられている。本書で明らかにされようとしている日本における保育の「多様性」と「地域性」の背景が簡潔に整理されており、読者の理解を助けてくれるとともに、続く個別事例への橋渡しがなされている。

個別事例としては、都心大企業の企業内保育所（3章）、湾岸部タワーマンション居住者の「保活」（4章）、保育サービス不足地域における小規模保育室事業（5章）、「ジェンダー化された空間」である大都市圏郊外における子育てNPO（6章）、地方観光地の長時間保育事業（7章）、工業都市川崎の学童保育（8章）、と様々な背景をもつ地域や対象が取り上げられている。これらの事例の検討をうけて9章では「地域に即した子育て支援

に向けて」、大都市と地方のそれぞれについて論じられている。

都心部、地方といった抱える事情の異なる地域を事例として取り上げることで、日本の保育における「多様性」と「地域性」がみごとに炙り出されている。都心、郊外といった二極軸でなく、職住近接の実現した湾岸部再開発地、ロークラス・ひとり親世帯の集中地区といったように都心内部の「地域差」が示されており、資料調査だけでなく、アンケート調査や聞き取り調査といった一次資料も使いながら説明されているため、より説得力が高い。また、「大企業・大都市都心型」の企業内保育所の利用者が、都心に自宅を持つことのできる高所得層に偏っている（3章）、都心湾岸部における共働き世帯が職住近接や豊富な民間サービスの利用によって就業継続を果たす一方で、保育所入所競争の激化から育児休業期間を十分に取得できないばかりか、世帯収入や妻の雇用形態が公的保育の利用可能性にも影響を与えている可能性がある（4章）、といったように、問題を具体的に明示したうえで、職場近くでの居住を可能にするような補助や保育所利用者の停滞を防ぐ企業間連携が必要である（3章）、保育所の開設が必要である（4章）、といった提言につなげ、「いかにすべきか」という解決のあり方を示している点も意欲的である。

本書でも指摘されているが、「待機児童」や「保活」は地方でも起こっている。とりわけ周辺地域から若者層が流入する県庁所在都市クラス以上では保育所が不足しているところがみられる。このような、より「典型的な」地方都市の実態も知りたいところである。

実は、評者は自らの子育てをきっかけとして、専門とするベトナムの子どもたちに関心を寄せるようになった。子どもの環境は自ら決めることができず、親をはじめ周囲の大人たちの意向が反映

される。その意味で、社会を映す鏡であると考えられるようになったからである。本書を読むと、「保育」にとどまらず、日本社会の「多様性」や「地域性」もみえてくるようで興味深い。

(筒井由起乃)